

サーマーン朝の「独立」

桐蔭学園高等学校 柴 泰 登

一 はじめに

我々教員は、アッバース朝のもとでイスラーム帝国として統一されたイスラーム世界が一〇世紀以降分裂していくことを生徒に教えている。けれども「なぜ分裂したのか」「どのような過程で分裂していくのか」については多くの場合、説明しないまま進めてしまっているのではないだろうか。しかしこの背景を説明しないまま授業を進めていくと、後代になって「イランⅡイスラーム文化」「トルコⅡイスラーム文化」「インドⅡイスラーム文化」といった民族文化とイスラーム文化の融合が起こるまでの大きな時代の流れを生徒が理解できなくなってしまう。

また我々はイスラーム世界の分裂を取り上げる際に「サーマーン朝が独立したこと」を例としてよく取りあげる。このサーマーン朝について用語集では以下のように説明されている。

『世界史B用語集』「サーマーン朝」(山川出版社) p.82,p.93

中央アジア最初のイラン系イスラーム王朝。西トルキスタンを支配し、この地にイスラーム教を伝えた。カラⅡハン朝によって滅ぼされた。(p.82)

サッフアール朝につづくイラン系イスラーム王朝。中央アジアから東部イランを支配し、アッバース朝から事実上の独立を果たした。支配下のブハラ・サマルカンド・メルヴなどの商業

都市が東西貿易で繁栄したが、一〇世紀末カラⅡハン朝に滅ぼされた。(p.93)

『必携世界史用語』「サーマーン朝」(実教出版) p.91

イラン系イスラーム王朝。中央アジアからイラン東部までを支配。アッバース朝の権威を認めつつも、実質的には独立。カラⅡハン朝に滅ぼされた。

いずれの場合も「実質的(事実上)」という留保の言葉を添えて「独立」したとしている。独立という言葉自体多分に近代的な意味合いを含む言葉でありそもそも慎重な用法が求められるが、用語集の表現は単純に独立とは言い切れない要素があることを意味しているだろう。そこで私はその事情についてここで詳しく調べた上で、イスラーム世界分裂の実態を考えることにした。

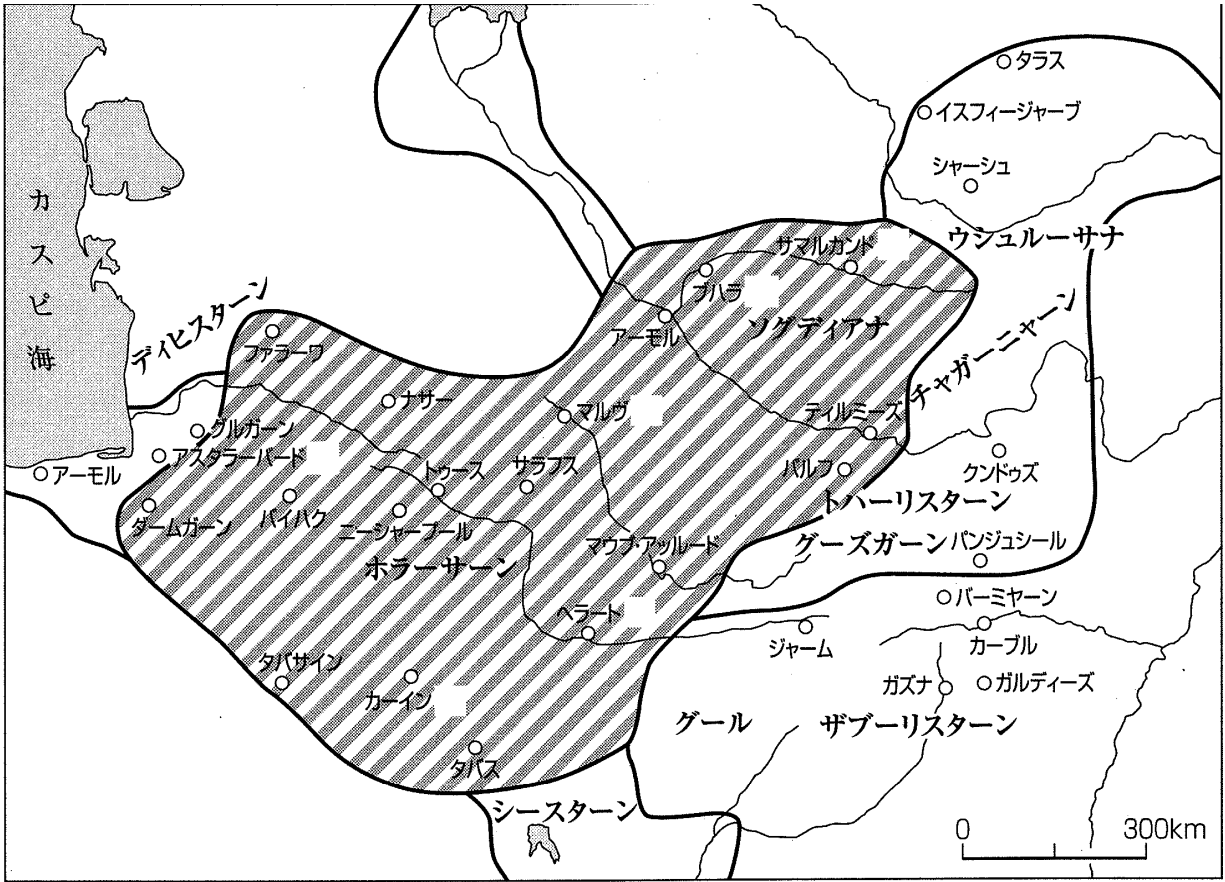
二 サーマーン朝のホラーサーン支配

サーマーン朝はその時期によって支配下に置いた領域が異なるが、成立初期から滅亡直前まで「ホラーサーン(イラン東部)」と「ソグディアナ(中央アジア西部)」はほぼ含んでいた(図一)。

そのうち、ホラーサーンは当時のアラビア語地理書(地誌)でその豊かさが繰り返し強調されている。またこの地方は、アッバース朝成立までにはアミール(司令官)が任命されて統治される地域となっており、既に「イスラーム世界に組み込まれて」いた。

こうした地域を治めるにあたって、サーマーン朝はどのような政策を行ったのであろうか。

図一 サーマーン朝の版図



サーマーン朝の対外関係

ペルシア語史料を見る限り、サーマーン朝はアッバース朝にしばしば使者を派遣している。

三二〇(ヒジュラ暦)／九三二(西暦)：カーヒルへ使者を派遣

三二三頃／九三四頃：ラーディーへ使者を派遣

三二九／九四〇：ムッタキーへ使者を派遣

これらはアッバース朝カリフが交代すると即時に派遣されている。そして彼らはホラーサーンのアミールに就任し、統治権を認められている。

彼らのこうした行動には次のような背景が考えられる。

三二八／九三九：サーマーン朝がカスピ海南東岸に勢力を張ったマーカーンを打ち破る。マーカーンはブワイフ朝勢力下のタバリスターン(カスピ海南西岸)へ逃亡。

三二九／九四〇：サーマーン朝がマーカーンと彼を支援したズィヤール朝のワシヤムギール・ズィヤールをレイ(現在のテヘラン付近)で打ち破る。

三二九／九四〇 ワシヤムギールがサーマーン朝に反撃するがタバリスターンで撃退される。

右のように当時豊かだったホラーサーンは係争地となっており、サーマーン朝はたびたび他勢力による挑戦を受けていた。それゆえ彼らが自らの支配の正統性を主張するためにアッバース朝からアミールに任命されることは必須であったに違いない。しかしこの事実からサーマーン朝が「独立」と解釈することは適当でないように思われる。従って、彼らがソグディアナをどのように支配したかについて改めて見る必要が出てくる。

三 サーマーン朝のソグディアナ支配

ソグディアナは「ソグド人の土地」という意味であり、有名なオアシス商業民族ソグド人の故地であった。アム川とシル川に挟まれたこの土地は比較的大規模な灌漑農業が可能であり、ブハラやサマルカンドを中心に繁栄していた。このオアシス農耕を支えたのがディフカーンと呼ばれた地主貴族層である。彼らはアラブ軍の侵入後も自らの信仰（主にゾロアスター教）や文化を保持し、隠然たる勢力を誇っていた。そのためアッバース朝期になってもこの地域にアミールは任命されず、一〇世紀になっても「イスラーム帝国外の世界」であった。従ってサーマーン朝がソグディアナを治めるには、ホラーサーンと異なる論理でその正統性を主張する必要があった。

ペルシアールネサンス

サーサーン朝の公用語であった「中世ペルシア語」文献と文字文化はアラブ軍の征服によりその殆どが失われた。けれども、被征服民となったイラン系の人々は口伝によつてその伝承を受け継ぎ、九世紀半ばになるとアラビア文字を用いて「近世ペルシア語」を表現することを発明した。それとともにペルシア文化が再び舞台上に復活したとされる。

この文化現象の担い手が実はソグディアナのディフカーンであった。彼らが生み出した現象は旧サーサーン朝領域にも波及し、その地域では「イラン的な」権威が再び価値を持ち始めた。そのため、古代ペルシアに縁のある人物を王朝の祖先とすることは統治の正統性を証明するひとつの根拠となっていた。

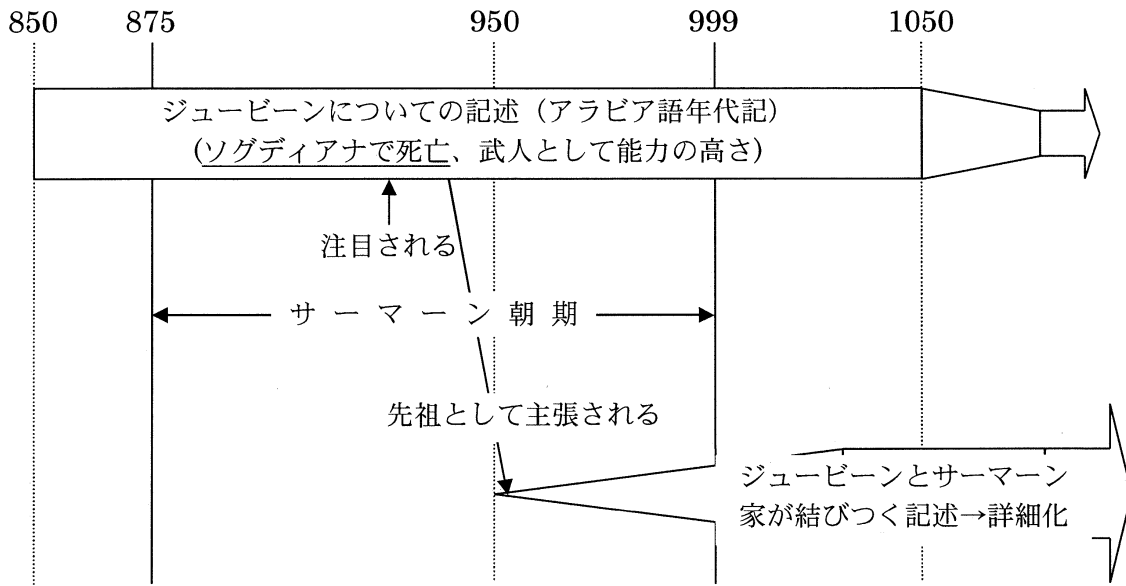
サーマーン朝の祖先について〈表一〉

サーマーン朝の直接的な祖先はサーマーン・フダー（八世紀前半）で、ソグディアナのディフカーン出身とされている。

この記述が見られるのはサーマーン朝中期の一〇世紀半ばからであるが、既にここではサーマーン・フダーの先祖が「バフラーム・ジュビーーン（バフラーム六世）」と紹介されている。このバフラーム六世なる人物はサーサーン朝の王（王中の王）（位五九〇・五九一）で、サーマーン朝成立以前からアラビア語年代記でしばしば触れられている。彼は武勇に特に優れ、フルムズド四世には一時的に権力を篡奪したもののホスロー二世に敗れ、最後はソグディアナで客死したとされる。

一〇世紀当時の社会で「武人としての優秀さ」は賞賛されるべきものとされており、かつソグディアナで客死した「サーサーン朝に縁のある」人物。バフラーム六世がペルシアールネサンスの潮流の中でサーマーン朝の先祖として選ばれたのは自然な流れであっただろう。こうしてサーマーン朝は、自らの支配の正統性をソグディアナのディフカーンに主張するために、政権成立後から彼とサーマーン家を結びつける系譜（ナサブ）作成に尽力したと思われる。その結果、サーマーン朝が滅亡する直前の一〇世紀後半までには詳細なナサブが形成され、後世にまでそれは語り継がれることになったのである（図二 サーマーン朝のナサブ形成）。

図二 サーマーン朝のナサブ形成



四 サーマーン朝の「実質的（事実上）」独立とは

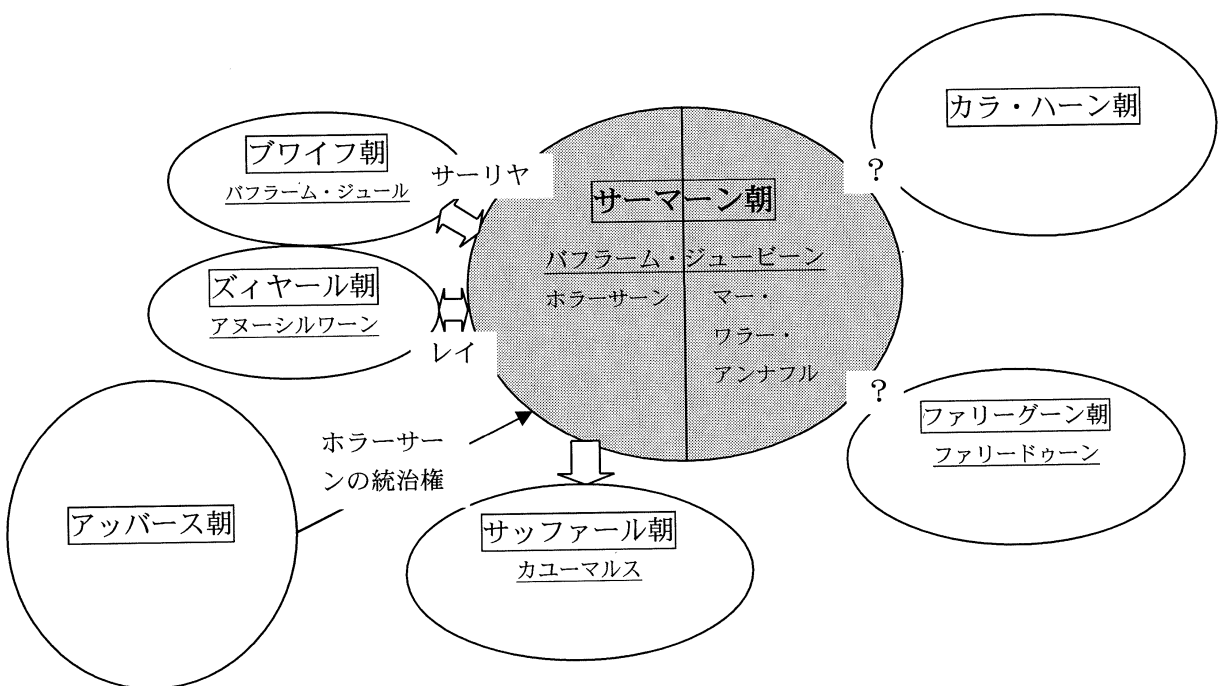
上で見たようにサーマーン朝の支配について精査すると、その統治の実態は単純なものではないことが明らかとなった。その結果を整理すれば次のようになるだろう。

まず彼らは、ホラーサーンの統治においては自らの支配の正統性を主張するためにアッバース朝の権威を利用した。その一番の理由は、そこがイスラーム世界だったからである。この在り方は、ブワイフ朝が大アミール、セルジューク朝がスルタンの称号を得て自らの正統性を保障して他のイスラーム王朝に対峙したと類似し、むしろ彼らに先んじたといえる。

一方イスラームの権威が及ばないソグディアナにおいては、その地域で支配的な権威（ペルシア文化）を利用して自らの支配を正統化した。こうした手法は当時の他王朝でも採用され、ペルシアの王やペルシアの伝説的英雄を戴くようになった（図三）ナスル二世期（一〇世紀半ば）の周辺世界）。イスラームのみに拘泥せず、民族固有の文化を受け入れていく姿勢は、その後の「イラン・イスラーム文化」隆盛の基礎を築いたともいえる。

このようにサーマーン朝は、当時の社会・地域情勢に適応した非常に柔軟で現実的な政策を選択していたといえる。しかしこうした適応は必然的にイスラーム帝国の分裂をもたらした。彼らはペルシア・イルネサンスという時代の潮流の中で、「アッバース朝から離れていかざるを得なかった」のである。

図三 ナスル二世期（一〇世紀半ば）の周辺世界



〈参考文献〉【日本語文献】

- 黒柳恒夫訳、カイ・カーウース、ニザーミー著
『ペルシア逸話集 カープースの書、四つの講話』
(平凡社) 一九六九
- 内藤みどり「トルコ大王シャーバについて」
『中国前近代史研究』(雄山閣出版) 一九八〇
- 服部直人「サーマーン朝家系譜上の諸問題」
『オリエント』(十八—) 一九七五
- 前嶋信次「ヤアクービー年代記中のチュルク族」
『内陸アジア史論集』(内陸アジア史学会) 一九六四

【英語文献】

- Bosworth C.E., *The Heritage of Rulership in early Islamic Iran and the Search for Dynastic Connection with the Past*(Iran 11), London, 1973
- Bosworth C.E., *The History of al-Tabari:vol.5 The Sasanids, the Byzantines, the Lakhmids, and Yemen*, State University of New York Press, 1999
- Frye R.N., *The Samanids:A Little-known Dynasty*(Muslim World Vol.L), New York(repr.), 1944
- Meisani, Julie Scott, *Persian Historiography:To the End of the Twelfth Century*, Edinburgh:Edinburgh University Press,1988
- Minorsky,V., *Hudud al-'Alam -The Regions of the world-*, Cambridge, 1937 2nd ed. 1970